

「臨牀透析」が40年目を迎えて思うこと

鶴屋 和彦*

「臨牀透析」が40年目を迎えるに当たり、私が経験してきた透析医療の歩みについて振り返りたいと思います。この40年の間に透析医療は劇的に進化し、患者さんの生活の質（QOL）と予後は飛躍的に向上しました。この長い年月のなかで、透析医療における最も顕著な進歩として三つの大きな発見と技術の向上が挙げられます。

第一に、腎性貧血の治療に革命をもたらしたエリスロポエチン（rHuEPO）の開発とその臨床応用が挙げられます。rHuEPOは、腎機能が低下した透析患者にとって貧血管理を劇的に容易にするものであり、その導入は透析医療に特筆すべき変革をもたらしました。この画期的な薬剤の開発に多大に貢献された熊本大学の宮家隆次先生には深い敬意を表します。2013年に開催された日本透析医学会では、大会長が平方秀樹先生で、私が事務局長を務めていたのですが、宮家先生に御登壇いただき、その偉大な功績を顕彰する機会を得たことは、私にとっても大変光栄なことでした。

第二に、透析アミロイド症の原因物質が $\beta 2$ ミクログロブリンであることが明らかになり、実際の臨床で活用されるようになったことです。この功績は、言うまでもなく下条文武先生の研究成果によるものです。何度か新潟で下条先生と会食をともにさせていただく機会があり貴重なお話を伺った際には、その知見の深さと医療に対する情熱に、深く感銘を受けたのを覚えています。この発見により透析アミロイド症に対する治療法が進歩し、多くの透析患者さ

* 奈良県立医科大学腎臓内科学

んの QOL が改善されました。

第三に、カルシメテックスの開発と臨床応用が挙げられます。カルシメテックスの登場は、副甲状腺ホルモンのコントロールを劇的に改善させました。この薬剤の登場後には副甲状腺摘出術がほとんど不要となり、最大の欠点であった嘔気の副作用も、その後開発された新薬の登場でほぼ完全に解決されました。この薬剤の導入により、医療の現場における変革を実感し、医学研究の重要性を痛感しました。とくに、日本では発売前に、患者さんたちが高額な費用をかけて輸入し服用していたという事実は、その薬剤がどれほど患者さんにとって価値あるものであったかを物語っています。海外より約1年遅れて国内で使用可能となったこの薬剤は、透析患者さんの QOL の向上に大いに貢献しています。

私が透析医療に携わるようになってからすでに32年が経過しましたが、40年目を迎える「臨牀透析」はその8年前から存在していたことになります。この長い年月のなかで、透析医療の発展を記録し、変革を見守ってきたこの雑誌が果たした役割は計り知れません。先日、創刊号の編集委員長を務められたのが前田貞亮先生で、編集委員には黒川清先生や鈴木正司先生が名を連ねておられたことを知り、改めてこの雑誌の貴重さを感じるとともに、今後もその重要な役割を果たし続けてほしいと願うばかりです。

医療の進化とともに、透析の技術や知識も日々深化し、患者さんの QOL を向上させるための努力が続けられています。透析医療の未来を見据えつつ、これからもいっそうの研鑽を積んでいきたいと思います。